第４節　小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

１．医学部総合研究棟改修Ｉ期工事に伴う予備発掘調査

調査地区　小串構内総合研究棟南側空閑地

調査面積　6.75㎡

調査期間　平成19年８月１日～６日

調査担当　横山成己　藤野好博

調査結果

（１）調査の経緯（図24）

小串構内において、保健学科研究棟（改修後は総合研究棟と改称）の改修工事が計画された。建物が位置する小串構内北部は、既往の調査により遺物包含層が良好に遺存することが確認されているため、平成18年度第９回埋蔵文化財資料館専門委員会（平成19年３16日開催）において、改修工事予定地で工事に先立ち予備発掘調査を実施することが承認された。

（２）調査の経過（図25、写真38・39）

調査では、既存建物南側空閑地に1.5m×1.5mの調査区を３ヶ所に設けた。調査区名は、西から順に第１～３調査区としている。

周辺地の調査歴を見ると、当調査地の南西約25m地点で実施した医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査では、造成土下に旧耕土、旧床土が確認されており、その下位に遺物包含層が３層にわたり形成されていることが判明した[註1]。最下層の暗青灰色砂層からは、土師器とともに縄文時代後晩期の深鉢底部が出土している。北東約200m地点で実施した医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査でもほぼ同様の層序が得られているため[註2]、今回の予備発掘調査では、現地表から旧耕土までの深度を確認することにした。

平成19年８月１日に第１調査区を掘削し、翌２日に第２調査区を、３日は台風５号接近のため作業を中止し、６日に第３調査区を掘削した。いずれの調査区においても旧耕土上面を確認しており、詳細を以下に記す。

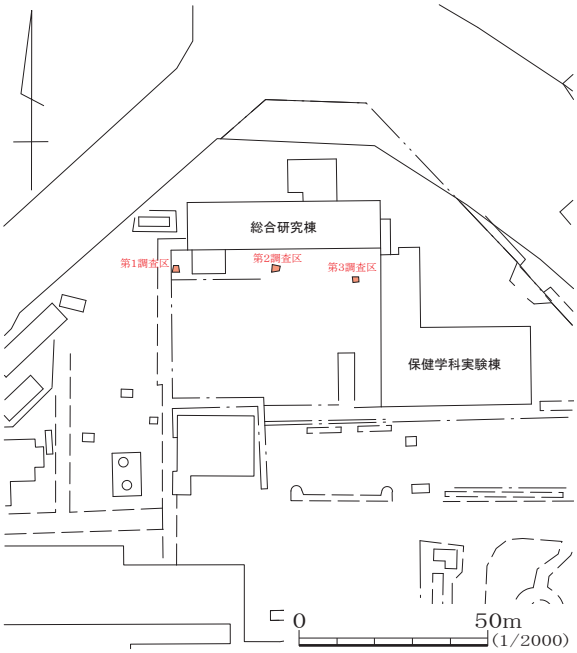


図 24　調査区位置図

写真 38　第2調査区調査前全景（東から）

写真 39　第3調査区調査前全景（南から）

（３）各調査区の層序（図26、写真40～42）

【第１調査区】

現地表（標高2.95m）下に２層の造成土を確認した。旧耕土である褐灰色（10YR4/1）粘土は現地表下1.45m（標高1.5m）で検出された。旧耕土は0.06～0.09mの厚みを有しており、下位に旧床土である褐灰色（10YR5/1）粘土が存在する。

【第2調査区】

現地表（標高2.89m）下に表土及び３層の造成土を確認した。旧耕土は現地表下1.25m（標高1.64m）で検出された。

【第3調査区】

現地表アスファルト（標高2.73m）下に３層の造成土を確認した。旧耕土は現地表下1.06m（標高1.67m）で検出された。

（４）小結

３ヶ所に設置した調査区全てで造成土下に旧耕土を確認した。既往の調査から推察すると、旧耕土・床土層の下位に海成砂質土の遺物包含層が存在する可能性は極めて高い。

現在の山口大学小串構内は、宇部市域を南流する真締川の右岸に面して立地している。この真締川は、現在ではそのまま南進して河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町（現ＪＲ居能駅南側）付近を河口としていた。近世文書「舟木宰判本控」には、寛政11年（1799）２月「御届申上候事」として、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第ニ川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度」との要望書が見られる。要約すると「本川（真

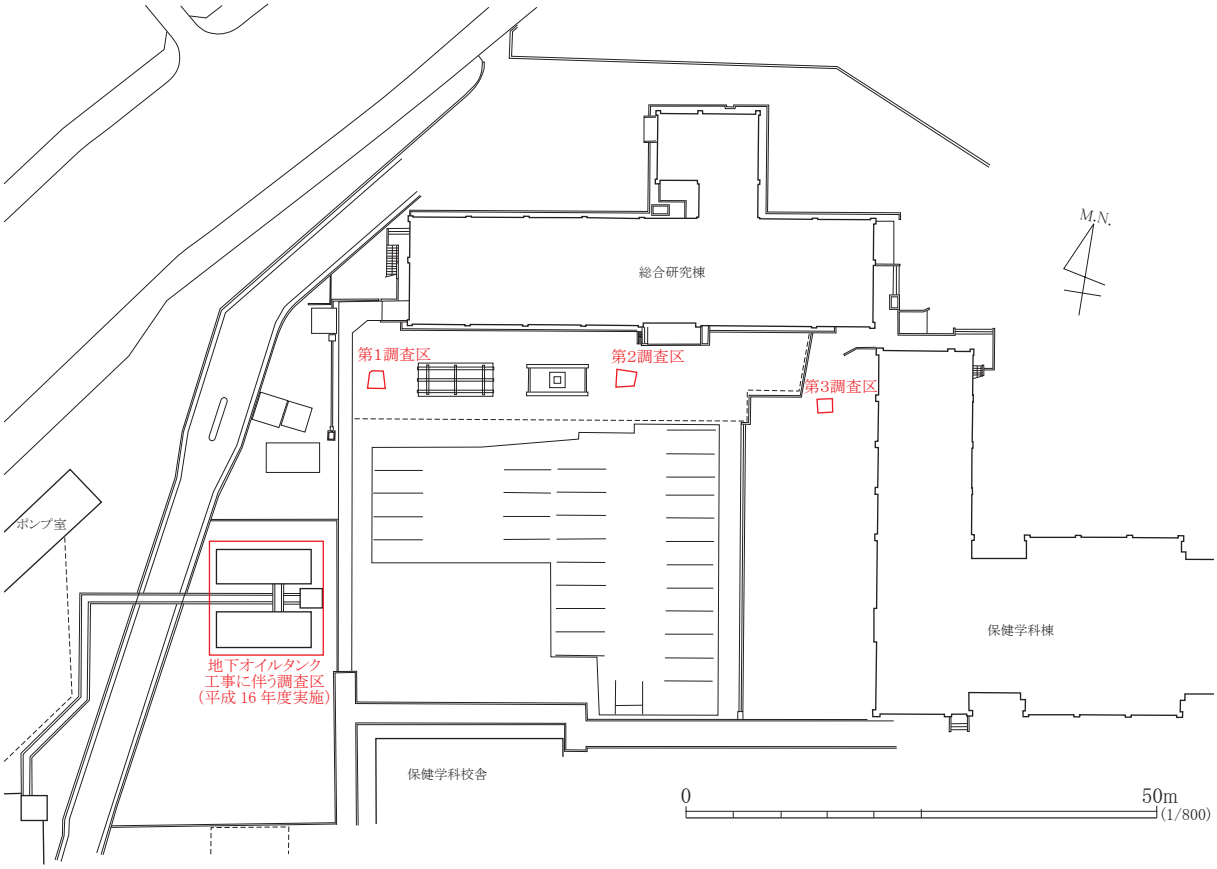
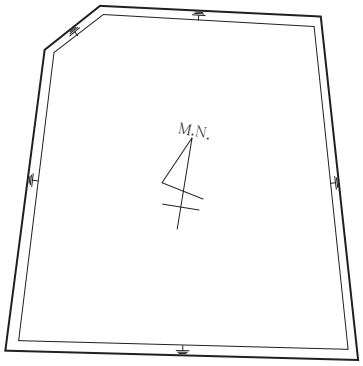
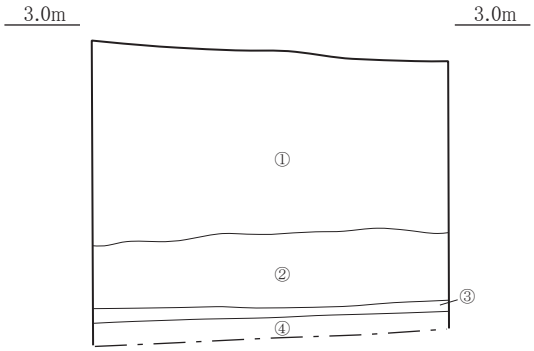


図 25　調査区詳細図



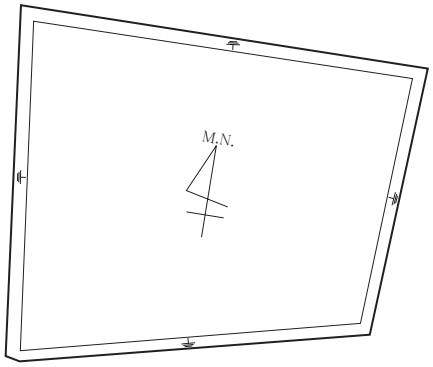
第1調査区平面図

0　1m (1/40)



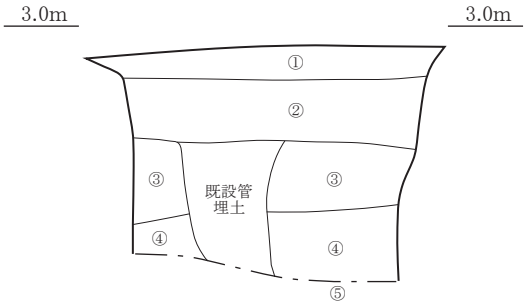
第1調査区南壁断面図

① 造成土1
② 造成土2
③ 褐灰色（10YR4/1）粘土…旧耕土
④ 褐灰色（10YR5/1）粘土…旧床土



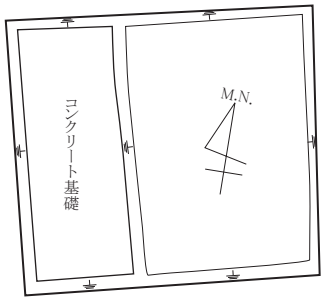
第2調査区平面図

0　1m (1/40)



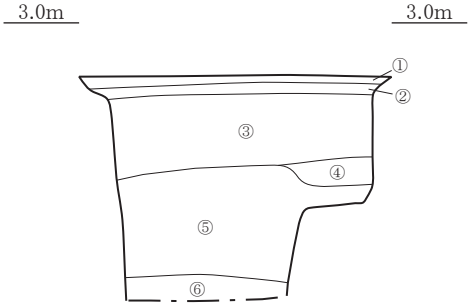
第2調査区西壁断面図

① 表土
② 造成土1
③ 造成土2
④ 造成土3
⑤ 褐灰色（10YR4/1）粘土…旧耕土



第3調査区平面図

0　1m (1/40)



第3調査区南壁断面図

① アスファルト
② 砕石・真砂土
③ 造成土1
④ 造成土2
⑤ 造成土3
⑥ 褐灰色（10YR4/1）粘土…旧耕土

図 26　調査区平面図・断面図

写真 40　第1調査区南壁土層断面（北から）

写真 41　第2調査区西壁土層断面（東から）

写真 42　第3調査区南壁土層断面（北から）

締川）が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせて欲しい」という内容である。この要望は実現し、その後同文書中に「弥水砂共ニ引宜ニ付、只今迄の川おは川尻留被申附候」という記述が見られ、付け替え工事によって川の流れが改善されたので、旧河口を封鎖して周辺地を耕地にしたいと萩藩に願い出ている。

現在の小串構内の地盤高は標高約３ｍという低地に位置しているが、これまでに構内で確認された旧耕土はいずれも標高約1.5m～1.6mと一定しており、耕土下には平均0.4mの床土が形成されている。その下位には砂を主体とする遺物包含層が幾層にも埋存しているが、この脆弱な地盤で生活が安定的に営まれたとは考え難い。

これらの状況は「舟木宰判本控」に所収されている文書の内容に一致しており、小串構内周辺は少なくとも19世紀初頭までは集落、田畑等が形成される環境下になかったものと推測される。

旧床土下に包含される遺物に関しては、真締川上流域を始め、小串構内の北西に隣接し小串古墳群が立地する小串丘陵に由来が求められるが、明言しうる状況にない。今後、山口大学医学部構内遺跡の調査の継続とともに、周辺地での埋蔵文化財調査が拡充すれば、自ずと明らかなものになるであろう。

なお、調査原因となった建物改修工事計画については、土地掘削が最深部でも１ｍとなっていることから、埋蔵文化財資料館専門委員会にて本発掘調査は不要と判断された。

小串構内は現状で空閑地が少なく、新規建物等が計画可能な場所はほぼ構内北部に限られている。構内北部は遺跡地内でも良好に埋蔵文化財が遺存する地点となっているため、今後とも慎重な対応が必要と言える。

［註］

1）横山成己（2006）「第１章第３節１．医学部基幹整備（オイルタンク他）工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口

2）横山成己（2006）「第１章第３節２．医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口

3）小川国治（1992）「第４編近世第３章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会（編）『宇部市史通史篇』上巻,宇部（山口）